

### 3. 大塚恭男先生の思い出

岡田 靖雄

青柿舎(精神科医療史資料室)

#### 1.

大塚恭男先生は昨年3月8日になくなった。

天候変化のはげしいなか、日本医史学会3月特別例会として「大塚恭男先生をしのぶ会」がひらかれた3月27日は、雲がはれて気温は普通であった。桜の咲き始めで、花はまるで今日の会にそなえられたかのようであった。会場のカンファレンスルームがびっしりになる65名が参加された。まず、酒井シヅ理事長の発声で大塚先生に黙祷した。

微笑の遺影を前にしての報告の最初は、原桃介先生(大塚先生の1年後輩、東京大学物療内科ののち同愛記念病院内科医長をながくつとめられた)の「戦後の日本漢方医学界の展望」で、日本東洋医学会および東亜医学協会を中心に漢方医学界の動きを整理されて、そのなかでの大塚先生の位置をしめされた。ついで小曾戸洋先生(東京薬科大学卒業、日本大学医学部をへて現在北里大学東洋医学総合研究所部長)が「大塚恭男先生の人と仕事」と題し、その家系および著書を中心に報告された。

#### 2.

「大塚恭男先生の思い出」の部は、大塚先生にとってのほぼ年代順に予定の6名がはなされた。

日高六郎先生(府立一中および東京大学医学部で同級、田坂内科入局、河北病院につとめていた)——府立一中入学は「大東亜」戦争開戦の翌年(1942年)で、まともな授業があったのは1年のときだけ。大塚君がかいた「A先生」は優秀で文集にのった。東京初空襲があり1機が校舎の真上をとんでいった。2年生になると学徒動員で、御

台場の海軍の材木置き場で材木かつぎ、ついで、教室の机の上で4角の筒をつくり、コンニャク糊で底をはった。それを有楽座にはこんでいって、筒に爆薬をつめて風船につけた(風船爆弾)。大塚君とは3年生のとき同クラス。3年2学期から軍需工場にでて航空機の部品づくり、日の丸鉢巻きで。大塚君はフライス盤をあつかっていた。しかし1945年春になると材料なく、工場にいてもやることがない。裏で大塚君と将棋をさしていた。艦載機の機銃掃射もうけた。そして4年の8月15日に敗戦。

学制改革があって別の道をあゆんでいたが、医学部で一緒になり、卒業しての田坂内科も一緒だった。外勤は大塚君は中川眞也君と日立病院で、僕は近くの日立多賀病院、よくあつてのんでいた。

大澤仲昭先生(医学部4年間を同グループで過ごし、沖中内科にはいり、第3内科助教授をへて大阪医科大学教授をつとめた)——名簿アイウエオ順で大澤、大塚とつづくので、医学部4年間一緒に行動した。しかも下宿が下高井戸、大塚君は当時父上と西荻窪にすんでいたもので、よく遊びにいったご馳走になっていた。食糧難の時代で、なんともありがたかった。あるとき父上敬節先生がでてきて、「漢方を勉強する気はないか」ときかれ、大塚君とともに『傷寒論』の講義をうけることになった。漢方にも西洋医学にも長短のあることを敬節先生におしえられた。インターンのとき、内田英一君、岡庭武君と同級生4人があつまって、漢方の雑誌にのった症例をカードにかきぬき、それを西洋医学の立ち場から検討した〔そのO委員会カードの大塚恭男作製のものの写しを配布〕。これは今でいうdata baseであり、EBMの

先駆ともいえる。

第3内科助教授となったとき、1985年ごろ漢方外来をはじめることにして、まず自分が西洋医学的にみた症例を大塚恭男先生および松田邦夫先生に漢方の面から診断していただき、自分が漢方処方。再来時にまた両方がそれぞれに評価するやり方をとった。このときは佐藤弘さんにもくわってもらった。あちこちの大学病院などの皮膚科で何年間もどうにもならなかった手掌角化症の症例は温経湯で数か月でよくなった。30年まえにNHKで漢方薬の再評価について対談したその記録がここにあるが、音声がいまうまくだせない。当時の大塚君はクリクリしていた。2006年に僕が第37回日本東洋医学会学術総会の会頭をした。このときの会頭講演は大塚君との対談にしたかったが、かなわなかったのは残念である。

岡田靖雄(精神科医、松沢病院などに勤務)——ぼくらが東京大学医学部に進学したのは1951年(昭和26年)4月。アイウエオ順に8人ずつのグループで実習などにはいるので、ぼくらはCグループ。内田英一さんは美甘内科から心臓血管研究所にすすんだ。大池眞澄さんは厚生省にはいって医務局長にもなった。そして、大澤さん、大塚さん。大森皓次さんもはじめ田坂内科で、国立がんセンターにつとめたが、はやく自動車事故死。ぼく。岡庭弘さんも田坂内科で、のち東京日立病院。それから岡本重幸さんははじめ物療内科で、あとは三島で開業している。

大塚さんにはじめてあったときは、アメリカ・インディアンにしているとおもった。顔があかぐろくて前髪がたっている。いま同級生にきくと小川鼎三先生の講義はわかりにくかったという人もおおいが、ぼくらにとっては印象的だった。“麻田剛立はですな”という艶があってしぶい声はいまも耳にのこっている。大塚さんもその講義に魅せられて“小川鼎庵先生”とともによんでいた。かれが医学史にひきよせられた最初であったか。学生時代のぼくはとくにまじめでもサボリでもなくて、適当に出席していた。大池さんが一番休みがおおかったか。

ぼくは日本医史学会にはわりあい早く入会し

ていたが、会合にでることはなかった。1974年(昭和49年)1月の例会は慶應の北里図書館でひらかれ、そのとき大塚さんが「脚気病院とその後」を報告した。それからは総会にもでるようになったが、懇親会ではのちのちまでもあう人ごとに“岡田君はぼくの同級だったんだよ”と紹介してくれた。1982年(昭和57年)3月に呉秀三先生没後50年記念会がおこなわれたが、かれは委員として準備にあたってくれ、また中心となるシンポジウム「呉秀三先生ののこしたもの」では一緒に司会にあたってくれた。

小川理事長が病気のあいだ大塚さんは理事長代行もつとめ、いずれは日本医史学会の理事長というのが衆目の一致するところだった。そのときは、かってでても常務理事になってかれをたすけようとおもっていたのに、ずいぶんはやく役職をしりぞいてしまった。歴史をまなぶものは、自分がいきってきた歴史についてもかたならなくてはならない。大塚さんとも時間をとって、お互いの歴史をかたりあいたかった。大塚さん、あんたははやくいきすぎたんだよな。

酒井シヅ先生(三重大学医学部卒、東京大学脳研究室〔当時小川先生はもういなかった〕で脳解剖学を研究したのち、順天堂大学の医史学研究室にはいった。日本医史学会理事長)——1967年(昭和42年)からのつきあいで、心の友だった。医史学研究室にはいっていくと、大塚先生がさきすすわっていて、小川先生から紹介された。当時の日本医史学会はなんともあわれな低調な状態で、会費もあつまらず、小川先生のポケットマネーとわれわれ二人の人力とで運営されていた。雑誌ができあがると、二人でリヤカーにのせて本郷郵便局まではこんだ。スタンプをおすのに、反対の右肩において、全部おしなおしたこともある。

谷口医史学シンポジウムは、小川先生の友人である帝人の元社長谷口豊三郎氏による谷口財団の事業としてひらかれたものである。大塚先生とは10数年間一緒にこの運営にあたった。海外・国内から数名ずつの参加者をえて1週間泊まり込みでおこなうもので、夜がたのしい。夜は大塚先生の部屋でのんだ。その夜の印象は今ものこっている

る。そのほかにもたのしかったことがおおい。オランダ、中国もご一緒した。

大塚先生はおおまじめだが、ちょっとぬけていた。ある会合でなかなかこられない。別の部屋にはいって、“どうもした顔がない”ともどってこられた。挨拶はいつも直立不動でされた。

大塚先生には東洋医学のことをいろいろおしえていただいた。“あとと酒の上のことで、それは酒の上で”。

高瀬清先生（東京薬科大学名誉教授、日本薬史学会理事）「大塚恭男先生とのご縁」——お会いする機会はおおくなく、定年後には時間がとれるかとおもっていたのに、こうなった。

1) 先輩の長沢元夫氏が山岸晃先生によるR. F. ヴァイス『植物療法』（八坂書房、1995）の翻訳に協力していて、訳文の校閲を大塚先生にお願いしたところ、一語一語原文とてらしあわせて意見をかいてくれた。人をほめない長沢さんが“大塚さんはこういう人だ”とほめていた。

2) イスクラ産業は1960年創業時、ポリオ流行に際しソ連からの生ワクチン輸入をひきうけて全国に配布し、ほとんど1年でポリオ流行を鎮静させた。このイスクラ産業が記念事業団を創設して1974年から、医薬の3人（医学東西から2名、薬学領域1名）に漢方研究イスクラ奨励賞を贈呈することになった。その選考委員として2001年まで大塚先生とご一緒した。大塚先生の推薦はレベルがたかくて、わかなくても賞にあずかっている大家を推薦し、視野がひろかった。あとで酒のなかで話をうかがいたかったが、充分にはきけなかった。

3) 沼田岳二氏は妻の父方の伯父にあたる人で、日本の免疫学の草分けの一人で、ワイル氏病の補体結合反応を研究した。北里の学長だった。95歳まで存命したが、なくなる2年前に挨拶にいったところ、東洋医学のことを諄々といていた。1997年2月、横浜・妙蓮寺の葬儀に参列したところ、隣りに大塚先生がすわっておられてびっくり！ もっと歴史を勉強しておくべきだったと、大塚先生におしえられたようにおもう。

花輪壽彦先生（浜松医科大学卒業、1982年か

ら北里研究所東洋医学総合研究所に勤務し、1991年から大塚所長をついで同研究所所長）——『大塚恭男先生顕彰記念文集』をよんで、こんな立派な先生につけた喜びに感無量であった。誠実でしかもユーモアのある先生だった。外来がいそがしくて午後までになるので、“お疲れでしょう”ともうしあげたら、“患者をみていれば煙草はすわぬし酒ものまぬし、頭はつかう、こんなに健康によいことはないよ”とのお答えだった。飄々と名言をはかれる方だった。

わたしはある有名な基礎医学者の主治医となった。左の脳梗塞、東大病院でリハビリをうけていたが、教授のメニューをいやがり、“じゃ、でていってください”といわれる始末。結局、どこでも院長と喧嘩して、ほかのどこの有名病院でもみはなされた。大塚先生とは武蔵一東大関係で交友があり、ひょこっと北里にきて、“みてくれよ”——“いいですよ”、“入院しようかな”——“いいですよ”ということで、“花輪君よろしく”となったのが9月。大塚先生とはウマがあい、診察も素直にうけていた。東大教授は胸をみず血圧をはからないのに、“大塚さんはちゃんとみてる”。血圧はいつも120/70。点滴をナースがすると“けしからん”と電話してくるので、それからはわたしが点滴、採血。“いたい”というので、一番ほそい小児用針でやったら“君、採血うまいねえ”と。電話番号おしえておいたら、“胸ちょっと変なんだよ”と夜中に電話。近くにすんでいたのかけつけた。自分の病室には1日最低3回は顔だせとの要求。

ヘヴィスモーカーで肺がんだったが、当時肺がんとはいえなかった。“どうしましょうか”と大塚先生に相談したら、“むずかしい感染症ということにしましょう、基礎の人は臨床をしらないから”。真菌症と説明した。“写真の影がおおきくなるのはどうしましょう。断層写真のフィルムをすこしずらしてとったのをみせていいでしょうか”と相談したら、“それはだめ”といったのちに大塚先生は、“でもすべての責任は僕がとります”といわれたので、ずらした写真をならべて“ちょっとちいさくなっています”と説明した。

その方が文化勲章をうけられるときは、“元気にしてくれ”というので大塚先生に相談したら、漢方でなくてステロイドのパルス療法の指示。ねたきりだった方が、しゃんとして皇居へいってきた。だんだんわるくなってきて、“ちょっともよくなるじゃないか”。大塚先生は直立不動で“食物がないときに煙草をすいすぎたからよくなるのです”，ご本人おこらず。“じゃ血圧はかりましょう，120/70，いいですよ”。

この方は12月25日になくなった。大塚先生は、えらい人だけど、わがまま，という人の扱ひも実に上手だった。本当の病状を患っていた奥様には、わたしもたいへん感謝された。

### 3.

これで予定されていた“思い出”はおわり、あとと参会者から二人のお話をいただいた。

大島智夫先生（横浜市立医科大学名誉教授，寄生虫学）——娘が声楽の勉強にウィーンに留学するとき、娘の面倒をみてくださる方の紹介を大塚さんをお願いしたところ、ゴーゴラックさん（ハンガリーからきた薬理学者，女性）を紹介された。大塚さんはドイツ語の達人で，人間関係もふかかった。ゴーゴラックさんは，大塚さんが紹介してくれた人なら大丈夫と，たいへんよく世話された。また，ウィーンの医史学の名所の回り方をこまかくかいてくださったのは，ありがたかった。

岡庭弘先生——僕も大澤君と一緒に，敬節先生から『傷寒論』をならった。□〔不明字〕となっているところにこういう字ははいると，3人で論じた。よく一緒に旅行したが，大塚君は漢詩をよんでいることがおおかった。

最後にご遺族を代表して渡辺賢次様（第2女紀子様夫，慶應大学医学部漢方内科）がたたれた。医学部へはいるとき，漢方をやりたいと北里へたずねてから，北里にいらしてもらえるまで17年かかった。寡黙で会話がはずまぬ人だが，酒をのむとはずむ。外面，内面とかわらず，どこか超然としている。部屋は本だらけで，その2階がくぼんでいた。休日は本か散歩，ようと漢詩をかく。中勘助の『銀の匙』をいつもよんでいた。日本人よ

りはインド人にちかいか，考え方が100年先，200年先，世俗を超越していた。コートと背広と一緒にぬいだことがあったのか，あるとき背広を2枚きっていた。おしゃれに縁のない人。

退職してからドイツへいった。ドイツがすぎてアメリカがきらい。アメリカの学会にいやいやながらいった。そこででの挨拶をわたしが準備したが，それをみないで立派に挨拶した。フランス語もやり，ロシア語もやった。頭の中ははんばでないが，それをひけらかすことはなかった。ヨーロッパに心の泉があるといっていた。アメリカには文化がないが，ヨーロッパにはある。ドイツのものはなんでもよい，万年筆も車も。

大塚先生は義父で師匠だった。臨床家としても家庭人としても尊敬できる人。交友範囲ひろく，今日もこんなにあつまっていた。葬式には患者さんが大勢こられたことにおどろいた。

つづいて参会のご遺族の方がたがたって挨拶された，——奥様泰子様，姉の山田美須壽様およびその夫山田光胤先生（本学会評議員）ほか6名。

また会場には独協医科大学寺野彰学長の挨拶がよせられていた。その一部分を紹介すると，“大塚先生のご業績はとて多く，特に東洋医学会及び日本医史学会へのご貢献が非常に大きかったと存じます。先生は，日本医史学会の常任理事として東洋医学史の研究を牽引され，またアジアと欧米の若手研究者の交流と育成にも努められました。／先生は常に柔和であり，かつリーダーとしての風格がありました。今も先生のありし日にこやかな笑顔が目に見えまいます。”

### 4.

特別例会がおわってから関係者の懇談がなされた。そこででた挿話をいくつか。

まず奥様の話から——元気なときから道をおぼえられず，また人の顔もおぼえられない人だった。追加して小曾戸先生から——一度研究所そばの高速道路にあがってしまい，“高速道路をあるいている人がいる”との電話があった。

姉山田美須壽様から——弟は小学校1年にはいって〔1月29日生まれで早あがり〕すぐは，しゃ

べらず、うたわず、手をあげず、休み時間は校庭の木をだいてないている、という子だった。“あなたの弟さんないているよ”といわれていた。ところが試験はよくできる。そこで受け持ちが“わかったことには手をあげなさい、さされたらこたえなさい”と指導し、それを約束させた。それからはよく手をあげるようになった。全校の朝礼であるとき校長が“カンボウってなにかしている人”といったら、かれ一人手をあげた。校長は“1年生でも官報をしっているのに”と6年生をしかった。弟が家にかえてこの話をしたが、かれ

の“カンボウ”はもちろん“漢方”であった。

なお美須壽様の歌に“泣き虫の弟案じ教室の外より日毎母見守りぬ”，“校庭の隅に泣きいる弟に途方にくれし私小学五年生”がある。

特別例会の当日には、大塚恭男先生顕彰会（東洋医学協会事務編集局内）による『大塚恭男先生顕彰記念文集』が配布された。本稿にえらんだ挿話は、同文集所載のものとはできるだけ重複しないようにした。はなしてくださった方がたの趣旨とくいちがう点が生じたら、お詫びしたい。